宮古島市文化財調査報告書第 14 集

千代田カギモリ原の古墓
千代田カギモリ原の壕

－陸自宮古島（29）文化財調査業務委託（宮古島市）に伴う発掘調査報告書－

2018（平成 30 年）
宮古島市教育委員会

例　　言

１．本報告書は、千代田陸上自衛隊駐屯基地工事に係る記録・保存調査の成果をまとめた報告書である。

２．本工事に伴い新規に発見された千代田カギモリ原の壕および古墓は、所在地の地名と小字名を冠して遺跡名とした。

３．千代田カギモリの古墓及び壕の発掘調査業務期間は、平成 29 年 10 月 30 日から平成 30 年 3 月 31 日までの期間で実施した。

４．発掘調査は、宮古島市教育委員会が直営して行った。
発掘調査及び資料整理業務は、設備設計メンテックと委託契約を締結し実施した。また、千代田カギモリの古墓より出土した人骨の分析業務については、株式会社文化財サービス沖縄営業所と委託契約を締結し実施した。

５．本報告書内における ref. は国立公文書館アジア歴史資料センターのレファレンス番号を示すものである。

６．本報告書は、久貝弥嗣が中心となり、菱木勇一ほかの協力を得て編集を行った。報告書の執筆は、以下のとおりである。
第 2 章 第 2 節 歴史的環境：山口直美、久貝弥嗣（文責：久貝弥嗣）
第 3 章 第 3 節 人骨分析：株式会社文化財サービス。　その他は、久貝弥嗣が執筆した。

７．発掘調査で得られた遺物、実測図、写真等の資料は、宮古島市教育委員会にて保管している。

目　　次

例言

第１章　経過 …… 1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　遺跡の位置 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　報告①－千代田カギモリ原の古墓－ …… 9
　第１節　墓１ …… 9
　第２節　墓２ …… 12
　第３節　人骨分析（株式会社文化財サービス） …… 17

第４章　報告②－千代田カギモリ原の壕 …… 26
　第１節　壕１ …… 26
　第２節　壕２ …… 28

報告書抄録

第１章　経　過

第１節　調査に至る経緯

今回発掘調査を行った、千代田カギモリ原の壕、千代田カギモリ原の古墓は、旧千代田カントリークラブ内における宮古島駐屯地等工事に伴い新規に発見された遺跡である。

宮古島市教育委員会では、工事に先立って行われた工事予定地内での確認調査において、2 基の壕と 2 基の古墓を確認した。この各 2 基の壕と古墓については、文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく新規遺跡の発見として、平成 29 年 6 月 28 日付宮教生第 696 号にて宮古島市教育委員会教育長宮國博より沖縄県教育委員会教育長平敷昭人へ報告が行われた。これに対し、沖縄県教育委員会教育長平敷昭人より平成 29 年 7 月 4 日付教文第 510 号にて報告を行った各 2 基の壕と古墓について埋蔵文化財包蔵地であることが了承され、それぞれの遺跡名は小字名を冠した千代田カギモリ原の壕と、千代田カギモリ原の古墓とされた。

その後、旧千代田カントリークラブの敷地内において宮古島駐屯地工事に伴い、平成 29 年 8 月 24 日付沖防第 4394 号にて、文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の通知について沖縄防衛局長より宮古島市教育委員会教育長宮國博あてに進達依頼が行われ、9 月 4 日付宮教生第 1127 号にて沖縄県教育委員会教育長へ進達を行った。これに対し、沖縄県教育委員会教育長平敷昭人より 9 月 13 日付教文第 798 号にて埋蔵文化財発掘の届出について宮古島市教育委員会教育長宮國博へ回答が行われ、9 月 20 日付宮教生第 1236 号にて宮古島市教育委員会教育長宮國博より沖縄防衛局長へ前記の届出について伝達を行った。この回答により、工事着手前に発掘調査を行う実施する必要があるとされた。

これにより、沖縄防衛局と宮古島市教育委員会とで発掘調査の費用、期間などについて調整が行われ、10 月 12 日に「宮古島駐屯地等工事に伴う埋蔵文化財に関する協定書」が宮古島市長下地敏彦と沖縄防衛局長中嶋浩一郎との間で締結され、千代田カギモリ原の壕及び千代田カギモリ原の古墓について記録保存調査を行うこととされた。10 月 18 日には、見積合わせが行われ、10 月 30 日に「陸自宮古島 (29) 文化財調査業務委託 (宮古島市)」が沖縄防衛局長中嶋浩一郎と宮古島市長下地敏彦との間で契約締結が行われた。本契約では、発掘作業、資料整理、報告書作成までを業務とし、平成 29 年 10 月 30 日から平成 30 年 3 月 31 日までを履行期限とした。

宮古島市教育委員会では、10 月 30 日より本業務に着手し、11 月末までに現場での発掘作業を終了し、資料整理作業、報告書作成の業務を行った。発掘作業及び資料整理業務については、支援業務としてそれぞれ委託契約を締結して作業を行い、古墓より出土した人骨についても業務委託を行った。11 月 15 日の発掘作業時には、古墓の調査地内より不発弾が発見され、翌日の 16 日には現場から撤去された。陸自宮古島 (29) 文化財調査業務委託 (宮古島市)」については、履行期限内に報告書の刊行までを行い業務を完了した。

第２節　調査体制

本調査を行った平成 29 年度の調査体制は以下のとおりである。

事業主体　宮古島市教育委員会　教育長　宮國　博

事業所管　生涯学習部　部　長　川満 広紀

事業総括　生涯学習部次長兼生涯学習振興課長　　久貝 喜一

　　生涯学習振興課課長補佐兼文化財係長　砂辺 和正

事業事務　生涯学習振興課　文化財係　主　　事　久貝 春陽

調査担当　生涯学習振興課　文化財係　主任主事　久貝 弥嗣

調査補助　生涯学習振興課　文化財係　嘱　　託　川満 広紀

臨時職員　菱木 勇一、山口 直美、森谷大介

文化財資料室資料整理作業員

草浦昌子、幸地ちはる、下地久美子、砂川幸子、高橋美智代、西里咲子、山里智子

千代田カギモリ原の古墓及び壕発掘調査支援業務　設備設計メンテック

千代田カギモリ原の古墓及び壕発掘調査支援業務　設備設計メンテック

千代田カギモリ原の古墓出土人骨分析委託業　株式会社文化財サービス

発掘調査報告書編集印刷委託業務　有限会社アプロ

写真１　墓１発掘作業風景

写真２　墓２発掘作業風景

写真３　不発弾除去作業風景（墓 2）

写真４　資料整理作業風景

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置

今回発掘調査を行った千代田カギモリ原の古墓及び壕は、宮古島市平良上野字野原の旧千代田カントリーゴルフ場の敷地内に位置する遺跡である。ゴルフ場の敷地内には、複数の森林地が残されており、規模のおおきな陥没地形もみられる。遺跡は、この森林地で確認されたもので、小規模な琉球石灰岩の岩山に壕が構築され、自然の岩陰を利用した古墓が確認された。

本遺跡の東側には野原岳を頂上部とした丘陵が北西－南東方向にはしっており、南側には陸軍中飛行場戦闘指揮所跡が位置する小丘陵も位置している。しかし、比較的平坦な地形の広がる本遺跡一帯では、太平洋戦時下においては陸軍中飛行場の滑走路が、本遺跡をはさむようにハの字型にひろがっている。遺跡一帯の地形は琉球石灰岩を基盤とするが、雨がふると周辺部から雨水がながれこむ地形となってい

第１図　遺跡位置図

図版1　遺跡の位置と旧日本陸軍中飛行場滑走路及び誘導路の相関図

第 2 節　歴史的環境

千代田カギモリ原の壕は、その位置からも陸軍中飛行場に関連する壕であり、関連する戦争遺跡として陸軍中飛行場と、陸軍中飛行場戦闘指揮所について整理を行っていきたい。

1. 陸軍中飛行場

陸軍中飛行場は、野原集落の西方から南方に位置し、南北 1,500m、幅 200m からなる滑走路（以下、南北滑走路）と東西 1,500m、幅 175m からなる滑走路（以下、東西滑走路）の 2 本から構成される。

戦史資料（ref.C11110031400）によれば、陸軍中飛行場の建設は昭和 19 年 5 月に第 205 飛行場大隊と第 129 野戦飛行場設定隊が着手している。工事には地元の住民も多く駆り出されている。前述した 2 本の滑走路に、普通掩体（中型用）が 30、秘匿掩体（中型用）35、小型用 10 が設けられ、誘導路の全長は 10,000m にも及ぶと記されている。掩体については、コの字型に約 2m の土盛を行い、天井部分を草木で覆って偽装する方法や、御嶽などの雑木林の中に秘匿する方法がとられていたことが聞き取り調査で確認がとられている。また、中飛行場の滑走路の構築にあたっては、砕いた石灰岩を敷詰めて転圧したマカダム舗装という工法がとられている。関連施設として、厚さ 1.5m の鉄筋コンクリートの高等司令部用戦闘指揮所が 1 基、厚さ 1m の鉄筋コンクリート建ての通信所を 1 基、急造茅葺建物 50 棟の居住設備を設けている。これらの関連施設として現存するのは、戦闘指揮所のみである。

陸軍中飛行場は、その軍事的性格から敵の空爆の目標とされることが多かった。体験談には、空爆された滑走路の爆撃跡を平坦にならすために、地元住民が駆り出されてその整地作業に従事している。

陸軍中飛行場から出撃した特別攻撃隊として、『沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦戦史叢書 36(16)』と知覧特攻平和館提供資料の 2 つで確認することができた。これらの資料から誠第 114 飛行隊と、誠第 116 飛行隊の 2 つの部隊が特別攻撃隊として陸軍中飛行場を利用している。

2. 陸軍中飛行場戦闘指揮所跡

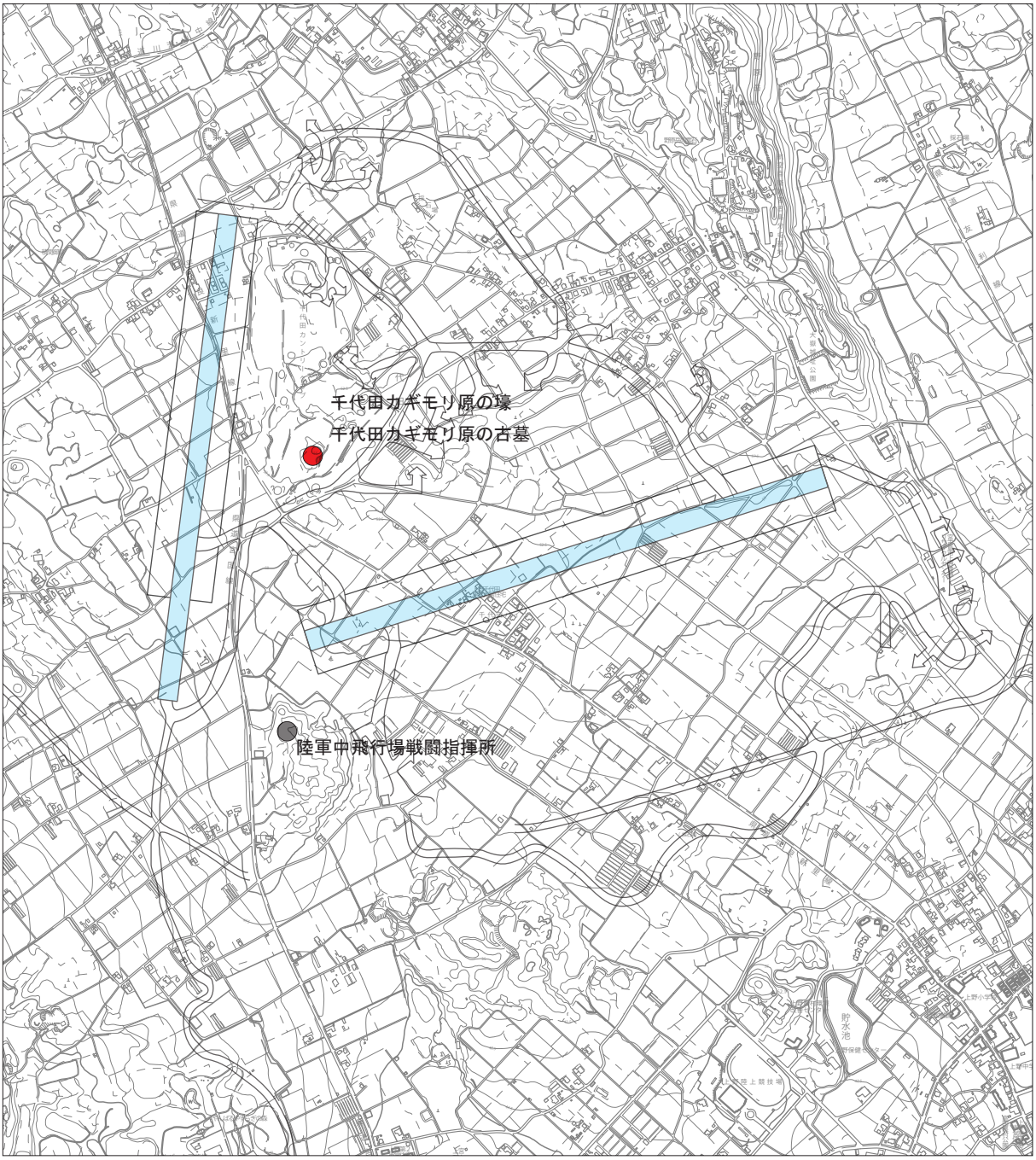
陸軍中飛行場戦闘指揮所跡は、昭和 19 年から建設が始まった。旧日本陸軍中飛行場の東西滑走路の西端付近の高台に造られた鉄筋コンクリート造りの壕である。この壕の設置された目的は、宮古島での地上戦が激化することを想定して非常時には指揮官がその中に入って指揮をとるために造られている。しかし、宮古島における戦闘はそこまでには至らず指揮所として機能していない。当時は、建物の上に盛土をして植物を植え、あわせて周囲の土塁にも植物を植えて、空から見て建物があることがわからないようにカモフラージュしていた。本飛行場には、旧陸軍 205 飛行場大隊が駐屯し、戦闘が激しくなるまでは同大隊のうち約 20 人が指揮所に常駐していた。戦闘が激しくなると指揮所には独立機関銃第 18 大隊山内小隊が駐留し、やがて終戦をむかえた。昭和 20 年 4 月 22 日に米軍の双発爆撃機により 250 キロ爆弾の直撃を受けたが、上部に小さな穴が開いた程度で大きな被害がなかったというほど強固なつくりであったといえる。

戦闘指揮所跡は、鉄筋コンクリート造りで、15 m × 15 mの方形状の構造をなしている。その外側には、もう一回り擁壁を巡らしており、南西側の正面部分はコンクリート造りであるが、それ以外の部分が土塁で構築している。この二つの擁壁の間は、約 1.7 mほどである。外側部分の入口は、幅が 1 m前後、高さは 2.0 mほどである。天井までの高さは約 3.0 mであり、天井部分のコンクリートの厚さが約 50 ㎝以上の強固なつくりとなっている。天井の一部崩落は崩落し、床面にその残骸が散乱している。中央部

分には二本の柱が残されている。壁面部分などは、戦後鉄筋を取り出すためにコンクリートをはがし取った痕が、ほぼ全面に見られる。

3. 野原岳

野原岳の丘陵部には、38 の壕が確認されている（沖縄県立埋蔵文化財センター 1995）。これらの壕群には第 28 師団の司令部壕の他に、御真影奉護壕、発電機壕、電波探知機壕、トーチカ、銃眼など多種多様な性格を有する壕で構成されている。このような多様な構成をもつ壕群は、宮古島内においては野原岳の丘陵部にのみ限られ、野原岳が当時の旧日本軍の中枢であったことを示している。



第 2 図　陸軍中飛行場滑走路跡と周辺遺跡

4. 忠魂碑

忠魂碑は、国のため忠義を尽くして戦死した兵士を祀った記念碑であり、宮古島市内には伊良部、平良、下地、城辺の４つの地区で確認されている。今回確認された忠魂碑は、前述した定義の忠魂碑とは異なり、慰霊の意味も含まれた記念碑である。

碑は、石灰岩を用いており、頂上部を三角錐形の尖らせており、部分的に破損している。現況としては、地中埋まった状態であるため、その全体形を計測することはできないが。一面には「忠魂碑」と掘り込まれ、その反対側の側面には、石碑の由来等が記されている（第３図、写真５～６)。破損しているため、全文を判読することはできないが、球 714 部隊である第 205 飛行場大隊が昭和 19 年 12 月 8 日建てたことが確認できる。

第 205 飛行場大隊は、陸軍中飛行場の建設の主要部隊の一つである。碑文内にも飛行場建設やその使用に関する内容がみてとれ、10 月 13 日の台湾沖航空戦についても触れられている。本碑は、これまで報告例がなかったが、聞き取り調査から、本来は、カーンミ御嶽の側に建てられていたものであり、戦後に石碑を現在の位置に移設したとのことである。今回の工事に際して、本来の御嶽近くに移設される予定である。

○○○○○○気進駐上陸天長之佳節當部隊任傍本島防
○○○○○○総力奉仕勤労協力許飛行場設定着手概成
○○○○○五日中同二十五日皇軍荒鷲為初着陸此間為
○○陣没諸勇士並十月十三日於台湾沖航空戦遂壮烈戦
○等傳勲功永久併資盡忠至誠之精神涵養本碑建立仍言
昭和十九年十二月八日
球第七一四部隊建之

第３図　石碑の記述

写真５　忠魂碑・碑文①

写真６　忠魂碑・碑文②

5 カーンミ御嶽

御嶽の入口は、コンクリートで固められた斜面上の道を 10m ほど登ると頂上は小さな広場になり、その奥に自然石を並べたイビがある。

この御嶽は、もともと、これより東側の平らな所にパルガー（泥）があって、その側にミズヌヌスを祀るイビがあったという。その後、周りの開発によって、現在地に移動されたという。

〔祭神〕中心の祭神はズトゥ主、その他リュウグウ、帳ヌ主を祀る。

〔主な祭祀〕タティバン　六月ユーブーイ・シツ　十二月トゥスヌバン

＊話者：我如古弘

上野村教育委員会 2000 年『上野村の御嶽～伝承と祭祀～』p273 ～ p274 より一部抜粋

写真 7　カーンミ御嶽（2017 年時）

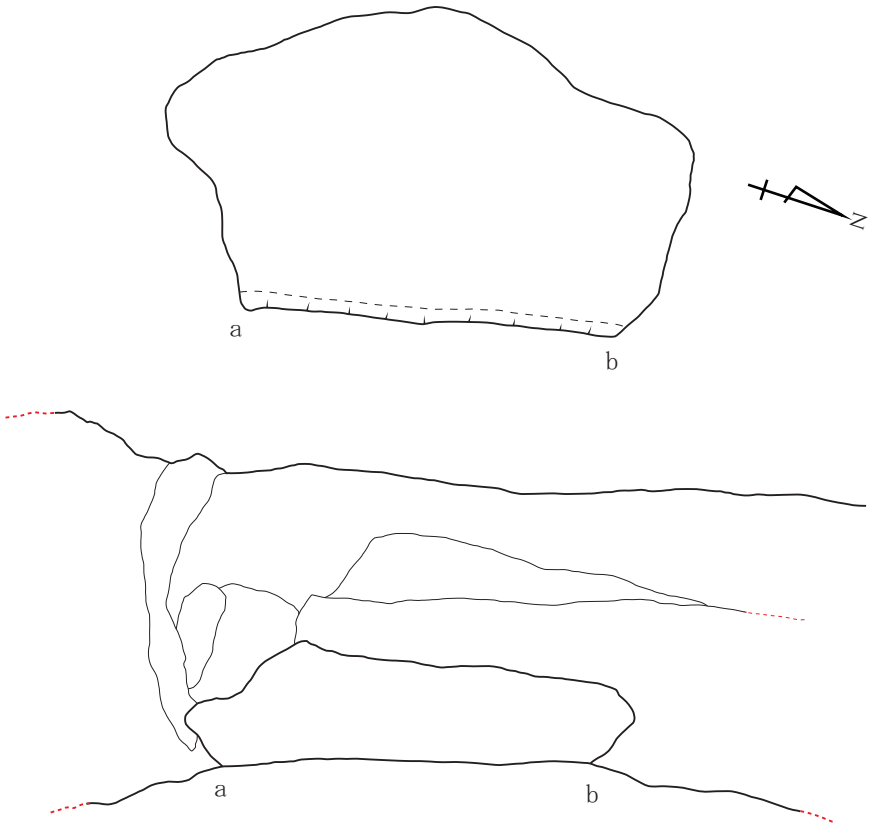
第３章　報告①－千代田カギモリ原の古墓－

第１節　墓１

１．遺構

墓１は、琉球石灰岩の自然の岩陰部分を利用した墓である。岩陰を形成する琉球石灰岩の岩山は、後述する墓２に比して大きく、壕２も同一の岩盤の露頭部分に構築されている。墓口部分の高さは約1.0～1.2mほどと低い。墓の内部の平面形態は略楕円形を呈しており、最大幅が3.6,、奥行き3.0mで、高さは約0.55mである。墓口は東に開口しており、墓口前には人為的な土盛がなされている。土盛は、長さ約5.4m、幅1.2m、高さ0.8mの規格を呈する。墓内部の堆積層は、２層から構成され、第１層は、現在の表土を含む墓内部への２次堆積層であり、10㎝大の琉球石灰岩なども含む。遺物や人骨は本層より出土する。第２層は、地山の赤土（マージ）層である。

岩陰の内部には、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器を中心とした遺物が散布しており、南側部分に比較的まとまって検出された。また、人骨も地表面で検出されていた。



第４図　墓１・墓内部の平面図及び見通し図

0　50　100cm

写真 8　墓 1 完掘状況

写真 9　墓 1 着手前の状況）

写真 10　遺物検出状況（沖縄産施釉容器）

写真 11　遺物散布状況（沖縄産無釉陶器）

写真 12　完掘状況（墓内部）

２．遺物

墓１からは、総数 26 点の遺物が出土している。最も出土量が多いのは、沖縄産施釉陶器で碗や壺が主体的に出土する。次いで沖縄産無釉陶器、土器、本土産磁器が出土する。遺物は、人骨も含め、墓の南側からまとまって出土しており、沖縄戦時に墓を壕として利用した際に、2 次的によせられたものと考えられる。以下各種類ごとの遺物の分類および出土状況について記す。

(1) 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は、墓１から最も多く出土しており、総数 18 点である。器種は、碗、小碗、壺、瓶、酒器が確認される。

碗は、全体で 6 個体が出土する。種類としては、白化粧を行い透明釉を施した碗が 3 点、灰釉碗が 1 点、褐色釉の碗が 1 点、白化粧に透明釉を施し、胴部に線刻の文様を施す碗が 1 点出土する。

小碗は 1 点で、白化粧に透明釉を施し、内底を蛇の目釉剥ぎする。

酒器は、黒釉を施した製品が 1 点出土する。

壺は、4 個体が出土する。黒釉を施した壺が 3 個体、灰色釉に頸部に褐色の文様を施す小型の壺が 1 点出土する。

蓋は、白化粧に透明釉で呉須で葉や果実の文様を施文する。

瓶は、いわゆる渡名喜瓶である。

(2) 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器は、壺が 7 個体分出土する。いずれも、口縁部がＬ字型を呈し、頸部は明瞭な稜をもって立ち上がる。7 個体の内 5 個体は、器高が 22 ～ 27 ㎝の中型で、主体をなす。その他は、器高が 18 ㎝とやや小型で、もう 1 点は、胴上部を欠損するため、全体の器高は不明であるが、他の 6 点に比べ大型の器形を呈する。

(3) 土器

土器は、胴部片が 1 点出土するのみである。2 ～ 3 ㎜の赤褐色粒子を含むことから宮古第Ⅱ式に分類される土器である。

(4) 本土産磁器

碗の底部が 1 点出土するのみである。型紙刷により施文を施す。瀬戸・美濃産である。

第１表　墓１出土遺物集計表

種類	器種	分類	残存状況	点数
沖縄産施釉	碗	灰釉碗	完形	1
		マンガン	口縁部～底部	1
		白化粧	完形	3
			口縁部～底部	1
	小碗	白化粧	口縁部～底部	1
	壺		口縁部～底部	2
			胴部～底部	2
	酒器		胴部～底部	1
	瓶		胴部～底部	1
	蓋		完形	1
	不明		口縁部	1
			底部	1
			胴部	1
沖縄産無釉	壺		完形	4
			口縁部～底部	2
			胴部～底部	1
土器	不明		胴部	1
本土産磁器	碗		底部	1
総計				26

第２表　墓１出土遺物観察表

図版・図番号		種類	器種	観察所見
第5図・図版2	1	沖縄産施釉陶器	碗	口径13.0㎝。底径6.7㎝。器高6.3㎝。灰釉碗。フィガキによる施釉。内底に輪状に砂目が付着し、畳付けにも付着する。器面は、焼成時の間隙によって凹凸が激しい。釉色は灰オリーブ、素地は灰白色を呈す。
	2		碗	口径13.2㎝。底径6.0㎝。器高5.9㎝。口縁部を一部に欠損。白化粧に透明釉を施す。口縁部は外反し、外面には轆轤痕が明瞭に残る。内底は蛇の目釉剥ぎし、畳付は露胎する。釉は灰白色で、素地は淡黄を呈す。
	3		壺	口径5.5㎝。底径10.8㎝。器高6.2㎝。口縁部を部分的に欠損。黒釉を、口縁部内面より高台脇まで施釉。畳付に砂目が付着。素地は灰白色。
	4		酒器	口縁部と注口部分を欠損。口縁部はラッパ状に開くと推察される。高台は上げ底状で外底は露胎する。釉はオリーブ黒を呈し、素地はオリーブ灰を呈す。
	5		瓶	底径8.8㎝。口縁部を欠損。瓢箪形の器形を呈す、いわゆる渡名喜瓶。高台脇まで施釉し、外底に筆状の工具で部分的に施釉する。釉はオリーブ黒で、素地は灰白色を呈す。
	6	沖縄産無釉陶器	壺	口径11.2㎝。底径8.5㎝。器高23.6～24.2㎝。口縁部はやや湾曲する。口縁部はＬ字型を呈し、頸部に明瞭な稜線を有する。内面は明瞭な轆轤痕を残す。底部付近に石灰が部分的に付着する。
	7		壺	底径16.4㎝。底部の接地面は湾曲し、安定しない。頸部に3条の沈線を廻らし、直径1.2㎝の円盤状の粘土を付す。外面は間隙が目立ち、器面に凹凸がみられる。オリーブ灰を呈し、部分的に浅黄の自然釉がかかる。

第２節　墓２

１．遺構

墓２は、琉球石灰岩の自然の岩陰を利用した岩陰墓である。墓の内部の平面形態は逆Ｕ字型の形態をなしており、墓口は南西方向に開口する。内部は1.7 × 1.5m で、高さは 0.3 ～ 0.5m と非常に低い。墓口部分では、一段の石積みが破口をふさぐように配置されていた。石積の石は約 60 ㎝ほどで自然の琉球石灰岩である。発掘調査時には、この石積みの下から不発弾が検出された。墓内部の堆積層は、2 層からなり、1 層は現在の表土も含めた墓内部の２次堆積層で、2 層が地山の赤土（マージ）層である。

2. 遺物

遺物は、総数 13 点が出土する。出土遺物の概要について以下に記す。

沖縄産施釉陶器は、酒器が胴部１点、底部１点が出土しており、同一個体と考えられる。外面に黒釉を施釉し、高台はあげ底状を呈する。

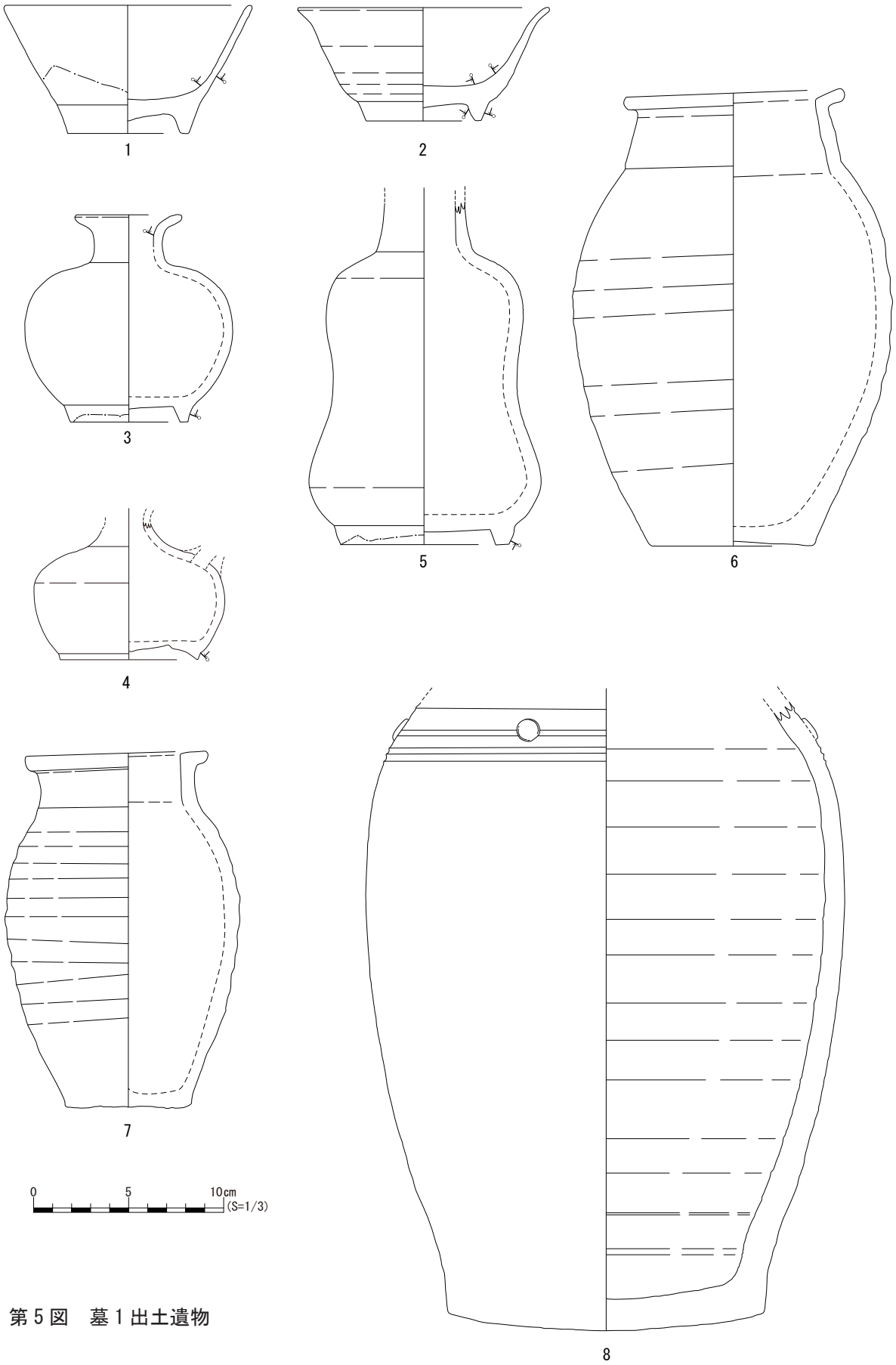
沖縄産無釉陶器は胴部片が３点出土する。いずれも小破片であるが、器種としては壺形が想定される。

キセルは青銅製で、火皿の部分が一部欠損するがほぼ完形である。全長 23.8 ㎝である。

近・現代の磁器が３点出土する。いずれも器種は湯飲みであり、完形 1.7 である。

鉄製品として釘が１点出土する。頭部の形態は円形で、全長 6.5 ㎝で錆による腐食が著しい。

瓶は３点出土する。２点は、同じ形態の瓶で、ゴム製のキャップ部分を有しており、褐色を呈する。もう１点はガラス製の完形のコップである。



第５図　墓１出土遺物

1

2

8

3

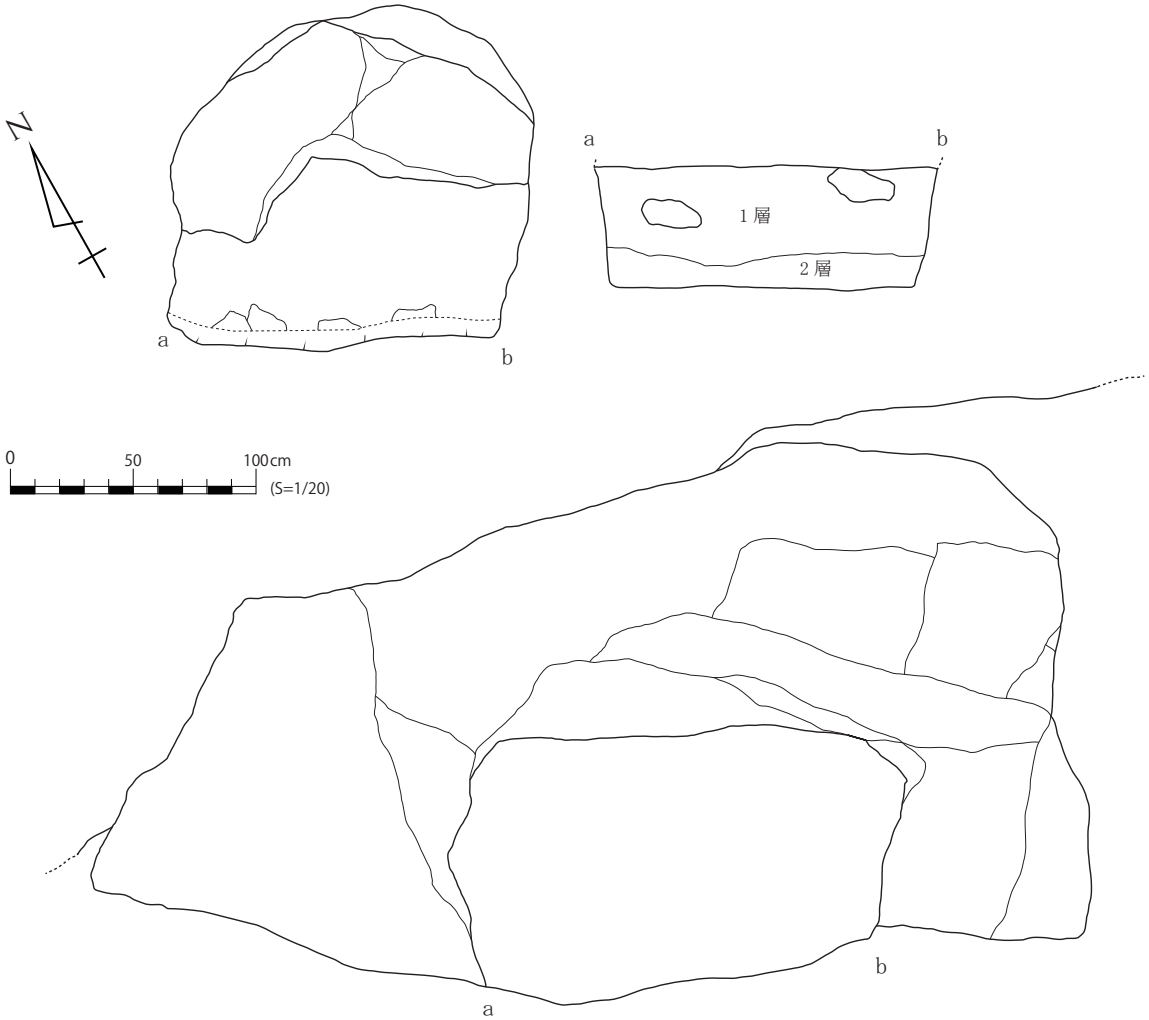
4

5

7

6

図版２　墓１出土遺物



第 6 図　墓 2・平面図、見通し図、土層断面図

写真 13　墓 2 の石積検出状況

写真 14　墓 2 の石積下から発見された不発弾

写真 15　墓 2 完掘状況

写真 16　墓 2 着手前

写真 17　墓 2 着手前の壕内部

写真 18　墓 2 完掘状況（平面）

写真 19　墓 2 発掘作業風景

第３節　人骨分析

１．はじめに

千代田カギモリ原の古墓から出土した人骨について分析結果を報告する。

２．調査の方法

人骨は洗浄作業を行った後、部位の同定および接合作業を行った。その後、接合された人骨片の残存 状況を図化（添付資料台帳）、被葬者数（最小個体数）推定の基礎資料とした。すなわち、性別・年齢・左右を考慮しながら、同側・同一部位をカウントし、得られた最大数をもって推定最小個体数とした。人骨鑑定の際に用いた年齢区分は Knussman(1988)1）を参考に、乳児（出生-1 歳）、幼児（1-約 6 歳）、小児（約 6-約 14 歳）、若年（約 14-約 20 歳）、成年（約 20-約 40 歳）、熟年（約 40-約 60 歳）、老 年(約 60 歳以上)とした。通常の計測は Knussman(1988)、顔面平坦度については Yamaguchi(1973)の方法に従った。墓ごとの分析結果を以下に示す。

３．出土人骨の所見

(1) 墓１

人骨の保存状態は良好で、ほぼ全身骨が検出された。推定される被葬者数は成人 17 体（男性 7・女性 10)、未成人 2 体（小児～若年 1・幼児 1）の合計 19 体である。未成人の割合が 10%で、少ないことが本墓の特徴である。下腿骨に骨膜炎の痕跡が数例認められた。労働環境、生活環境などは厳しかったことがうかがえる。

歯の咬耗度からみた年齢推定の結果、20 代前半、30 代、33 歳 -45 歳、老年が確認できた。

部位別集計表及び推定被葬者数は表 1 ～ 2、被葬者構成グラフを図 1 に示した。

各部位ごとの計測値を付表に示す。

頭蓋骨：表 3 参照。頭蓋骨計測値が得られたのは女性 1 体のみである。上面からみた頭形を示す長幅示数は 78.8 で、中頭型（75.0 ～ 80.0）である。

四肢骨：表 4 ～ 6 参照。大腿骨の柱状傾向、脛骨の扁平傾向などは認められない。農耕および海洋資源 などを利用した生活だったと思われる。

大腿骨最大長からピアソンの方法を用いて推定した平均身長は、女性 143.6cm である（表 6)。男性 の計測値は得られなかった。

(2) 墓２

人骨の保存状態は良好で、成人男性 1 体の全身骨が検出された。年齢は上顎の全歯、下顎の全歯が生前に脱落しており、歯槽骨の吸収も顕著であることから、老年と推定される。

各部位ごとの計測値を付表に示す。

頭蓋骨：表 3 参照。上面からみた頭形を示す長幅示数は 76.1 で中頭型（75.0 ～ 80.0）である。

四肢骨：表 4 ～ 6 参照。大腿骨の断面示数（右：103.8、左：116.0）は、やや柱状傾向を示している。脛骨の断面示数（右：59.3、左：63.0）からは、扁平傾向が認められた。

橈骨最大長からピアソンの式を用いて推定した身長は 161.8cm である（表 6)。

４．まとめ

千代田カギモリ原の古墓の発掘調査では、2 基の墓から 20 体の被葬者数が確認できた。その構成は 成人男性 8 体、成人女性 10 体、未成人 2 体である。未成人の割合が全体の 10%となっている。形質の特徴については、頭形は中頭型である。墓 2 出土の男性 1 体には大腿骨の柱状傾向、扁平傾向 が認められたが古墓全体としては見られなかった。男性の推定身長が得られたのは墓２出土の 1 体のみで 161.8cm､女性の推定平均身長は約 143.6cm である。下腿骨に骨膜炎の痕跡が数例認められ、労働環 境、生活環境などは厳しかったことがうかがえる。

参考文献

1) Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.

2) Yamaguchi B. (1973) Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bulletin of the National Science Museum, vol.16, pp.161-171.

表6 推定身長（四肢骨最大長より推定）

	男性		女性	
	右	左	右	左
上腕骨			141.7	
橈骨	161.8			
大腿骨				143.8
				145.4
平均			143.6	

(cm)

表1　千代田カギモリ原の古墓　墓1　部位別集計表/推定被葬者数

		成人				未成人						計	備考
		男性	女性	不明	計	若年	小～若	小児	幼児	乳児	計		
側頭骨	右	3	1	2	6		1				1	7	
	左	2	1	1	4		1				1	5	
下顎骨	右			7	7						0	7	
				8	8						0	8	
	左			7	7						0	7	
上腕骨	右	4	4	1	9						0	9	
	左	4	5	1	10				1		1	11	
尺骨	右	5	2		7						0	7	
	左	1	4		5						0	5	
橈骨	右	3		1	4						0	4	
	左	2	2	1	5						0	5	
寛骨	右				0						0	0	
	左				0						0	0	
大腿骨	右	7	10		17						0	17	
	左	7	9		16				1		1	17	
膝蓋骨	右				0						0	0	
	左				0						0	0	
脛骨	右	7	6		13						0	13	
	左	6	5		11						0	11	
腓骨	右	3	1		4						0	4	
	左	3		1	4						0	4	
推定最小個体数		7	10		17		1		1		2	19	

表2　千代田カギモリ原の古墓　推定被葬者数

出土地	成人				未成人						計
	男性	女性	不明	計	若年	小～若	小児	幼児	乳児	計	
墓1	7	10		17		1		1		2	19
墓2	1			1						0	1
計	8	10	0	18	0	1	0	1	0	2	20

図1　千代田カギモリ原の古墓　被葬者の構成

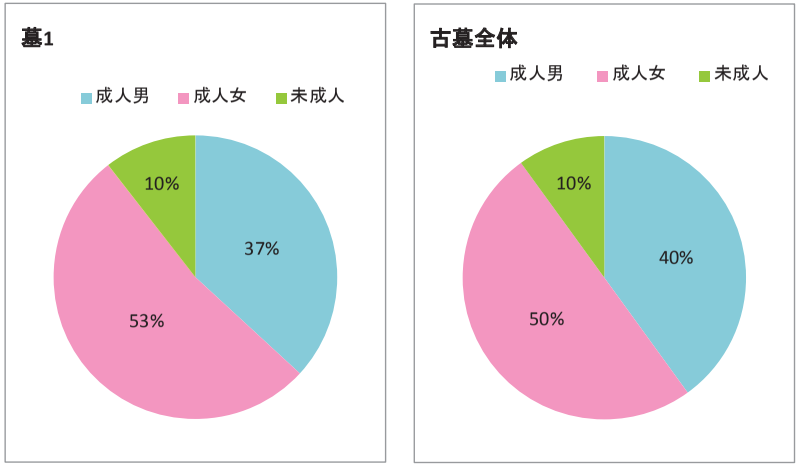


表3　千代田カギモリ原の古墓　頭蓋主要計測値

(mm)

	性別	女性	男性
	人骨番号	墓1-112	墓2
1	頭蓋最大長	170	176
5	頭蓋基底長	96	101
8	頭蓋最大幅	134	134
9	最小前頭幅	89	93
17	ﾊﾞｼﾞｵﾝ･ﾌﾞﾚｸﾞﾏ高	134	132
40	顔長	91	94
43	上顔幅	96	104
44	両眼幅	90	99
45	頬骨弓幅	121	
46	中顔幅	96	94
48	上顔高(pros)	62	65
48	上顔高(alv)	63	67
51r	眼窩幅(r)	40	44
51l	眼窩幅(l)	40	44
52r	眼窩高(r)	33	33
52l	眼窩高(l)	31	34
54	鼻幅	25	25
55	鼻高	49	57
8/1	頭蓋長幅示数	78.8	76.1
17/1	頭蓋長高示数	78.8	75.0
17/8	頭蓋幅高示数	100.0	98.5
48/45	上顔示数K(pros)	51.2	
48/46	上顔示数V(pros)	64.6	69.1
48/45	上顔示数K(alv)	52.1	
48/46	上顔示数V(alv)	65.6	71.3
52/51	眼窩示数(r)	82.5	75.0
	眼窩示数(l)	77.5	77.3
54/55	鼻示数	51.0	43.9
顔面平坦度	前頭骨弦	89.4	98.3
	l	47.7	51.6
	r	48.8	52.4
	垂線高	18.2	17.0
	平坦度示数	20.3	17.3
	鼻骨弦	7.2	9.7
	l	4.5	6.3
	r	4.2	7.0
	垂線高	2.4	4.5
	平坦度示数	33.9	46.8
	頬上顎弦	95.6	94.7
	l	50.5	49.5
	r	53.0	52.9
	垂線高	19.8	19.5
	平坦度示数	20.7	20.6

表4　千代田カギモリ原の古墓　上肢骨計測値

(mm)

男性	右					左				
上腕骨	N	M	S.D.	Max.	Min.	N	M	S.D.	Max.	Min.
1 最大長										
						1	48.0			
	1	57.0								
5 中央最大幅	2	21.0	0.0	21	21	3	20.0	0.8	21	19
6 中央最小幅	2	16.0	0.0	16	16	3	16.7	1.2	18	15
7 最小周	2	58.5	1.5	60	57	3	59.0	2.2	62	57
7a 中央周	2	64.0	0.0	64	64	3	62.7	3.1	67	60
						1	41.0			
6/5 体断面示数	2	76.2	0.0	76.2	76.2	3	83.2	3.1	85.7	78.9
7/1 長厚示数										

(mm)

女性	右				
上腕骨	N	M	S.D.	Max.	Min.
1 最大長	1	255			
	1	253			
	1	42			
	2	48.0	1.0	49	47
5 中央最大幅	2	15.5	0.5	16	15
6 中央最小幅	2	12.0	1.0	13	11
7 最小周	2	44.5	0.5	45	44
7a 中央周	2	47.0	1.0	48	46
	1	116			
	1	35			
	1	37			
6/5 体断面示数	2	77.3		81.3	73.3
7/1 長厚示数	1	17.3			

付表　千代田カギモリ原の古墓　上肢骨計測値

(mm)

	墓1	墓2	墓1			墓1	
	男性	男性	男性	男性	男性	女性	女性
	右	右	左	左	左	右	右
上腕骨　人骨番号	1		22	23	25	10	11
1 最大長						255	
2 全長						253	
3 上幅					48	42	
4 下端幅		57				47	49
5 中央最大幅	21	21	20	19	21	16	15
6 中央最小幅	16	16	17	15	18	13	11
7 最小周	57	60	58	57	62	44	45
7a 中央周	64	64	61	60	67	48	46
8 頭周径						116	
9 頭横径						35	
10 頭高径					41	37	
6/5 体断面示数	76.2	76.2	85.0	78.9	85.7	81.3	73.3
7/1 長厚示数						17.3	
推定身長(cm)						141.7	

(mm)

	墓2
	男性
橈骨	右
人骨番号	
1 最大長	232
2 生理長	222
3 最小周	38
4 体横径	15
5 体矢状径	12
3/2 長厚示数	17.1
5/4 体断面示数	80.0
推定身長(cm)	161.8

表5　千代田カギモリ原の古墓　下肢骨計測値

(mm)

男性	右					左				
大腿骨	N	M	S.D.	Max.	Min.	N	M	S.D.	Max.	Min.
1 最大長										
6 体中央矢状径	6	24.2	1.5	27	23	5	25.0	2.1	29	23
7 体中央横径	6	26.0	1.2	27	24	5	26.2	1.2	28	25
8 体中央周径	6	78.5	2.4	82	75	5	79.2	2.1	81	75
9 体上横径	6	30.3	1.5	32	28	5	30.2	1.7	32	27
10 体上矢状径	6	21.8	1.5	25	21	5	22.8	1.7	26	21
6/7 体中央断面示数	6	93.1	6.5	103.8	85.2	5	95.8	10.7	116.0	85.7
10/9 体上断面示数	6	72.3	7.9	89.3	65.6	5	76.0	10.3	96.3	67.7

(mm)

女性	右					左				
大腿骨	N	M	S.D.	Max.	Min.	N	M	S.D.	Max.	Min.
1 最大長						2	369.0	4.0	373	365
6 体中央矢状径	4	20.8	0.8	22	20	2	18.5	1.5	20	17
7 体中央横径	4	23.5	1.5	25	21	2	19.5	1.5	21	18
8 体中央周径	4	70.5	2.6	73	67	2	59.5	0.5	60	59
9 体上横径	4	29.0	1.2	30	27	2	23.5	0.5	24	23
10 体上矢状径	4	19.5	1.1	21	18	2	17.0	1.0	18	16
	1	81.0				2	77.0	3.0	80	74
	1	38.0				1	35.0			
6/7 体中央断面示数	4	88.6	5.7	95.2	80.0	2	94.8	0.4	95.2	94.4
10/9 体上断面示数	4	67.4	4.3	70.4	60.0	2	72.5	5.8	78.3	66.7

(mm)

男性	右					左				
脛骨	N	M	S.D.	Max.	Min.	N	M	S.D.	Max.	Min.
1a 最大長										
8 中央最大径	4	27.3	1.1	29	26	4	27.3	1.8	30	25
8a 栄養孔位最大径	4	31.3	1.9	33	28	4	31.3	1.3	33	30
9 中央横径	4	18.8	1.8	21	16	4	18.8	1.1	20	17
9a 栄養孔位横径	4	22.0	2.3	26	20	4	21.8	1.5	24	20
10 骨体周	4	73.8	4.0	80	69	4	73.3	4.8	81	68
10a 栄養孔位周	4	83.5	3.6	89	79	4	84.3	2.9	89	82
10b 最小周	4	68.3	2.8	71	65	4	68.8	2.9	72	65
9/8 中央断面示数	4	68.9	7.1	77.8	59.3	4	69.0	4.8	76.0	63.0
9a/8a 栄養孔位断面示数	4	70.6	8.0	81.3	60.6	4	69.6	3.5	73.3	65.6

(mm)

女性	右					左				
脛骨	N	M	S.D.	Max.	Min.	N	M	S.D.	Max.	Min.
1a 最大長										
8 中央最大径	1	21.0				2	22	1.0	23	21
8a 栄養孔位最大径	1	25.0				2	25	1.5	26	23
9 中央横径	1	15.0				2	17	0.0	17	17
9a 栄養孔位横径	1	18.0				2	19	0.5	19	18
10 骨体周	1	65.0				2	61	1.0	62	60
10a 栄養孔位周	1	71.0				2	69	1.0	70	68
10b 最小周	1	65.0				2	60	1.0	61	59
9/8 中央断面示数	1	71.4				2	77.5	3.5	81.0	73.9
9a/8a 栄養孔位断面示数	1	72.0				2	75.9	6.7	82.6	69.2

付表　千代田カギモリ原の古墓　下肢骨計測値

	墓1					墓2	墓1				墓2	墓1										(mm)
	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
	右	右	右	右	右	右	左	左	左	左	左	右	右	右	右	左	左	左	左	左	左	左
大腿骨	147	150	152	154	155		161	170	171	172		148	149	151	156	159	160	162	165	168	173	174
1 最大長																					365	373
2 全長																					363	366
6 体中央矢状径	25	23	24	23	23	27	24	25	23	24	29	22	20	20	21	22	21	20	25	20	17	20
7 体中央横径	27	24	25	27	27	26	27	26	25	28	25	24	25	21	24	23	23	23	24	21	18	21
8 体中央周径	82	75	76	80	78	80	80	80	75	80	81	73	73	67	69	71	68	68	77	63	59	60
9 体上横径	32	29	30	31	32	28	32	31	30	31	27	29	30	27	30	28	30	28	29	26	23	24
10 体上矢状径	22	21	21	21	21	25	23	22	22	21	26	20	21	19	18	22	18	18	21	17	18	16
13 上端長															81						74	80
18 頭垂直径															38						35	
19 頭矢状径																						
20 頭周径																						
21 上顆幅																					61.0	
8/2 長厚示数																					16.3	16.4
6/7 体中央断面示数	92.6	95.8	96.0	85.2	85.2	103.8	88.9	96.2	92.0	85.7	116.0	91.7	80.0	95.2	87.5	95.7	91.3	87.0	104.2	95.2	94.4	95.2
10/9 体上断面示数	68.8	72.4	70.0	67.7	65.6	89.3	71.9	71.0	73.3	67.7	96.3	69.0	70.0	70.4	60.0	78.6	60.0	64.3	72.4	65.4	78.3	66.7
(6+7)/2 頑丈示数																					9.6	11.2
推定身長(cm)																					143.8	145.4

	墓1			墓2	墓1			墓2	墓1		(mm)
	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	女性	女性	女性
	右	右	右	右	左	左	左	左	右	左	左
脛骨	87	88	90		107	109	110		81	97	98
1a 最大長											
8 中央最大径	26	29	27	27	25	27	30	27	21	21	23
8a 栄養孔位最大径	28	33	32	32	30	32	33	30	25	23	26
9 中央横径	19	19	21	16	19	19	20	17	15	17	17
9a 栄養孔位横径	21	20	26	21	22	21	24	20	18	19	18
10 骨体周	73	73	80	69	72	72	81	68	65	60	62
10a 栄養孔位周	79	83	89	83	82	84	89	82	71	68	70
10b 最小周	66	71	71	65	67	71	72	65	65	59	61
9/8 中央断面示数	73.1	65.5	77.8	59.3	76.0	70.4	66.7	63.0	71.4	81.0	73.9
9a/8a 栄養孔位断面示数	75.0	60.6	81.3	65.6	73.3	65.6	72.7	66.7	72.0	82.6	69.2

墓1 頭骨 上面

墓2 頭骨 上面

墓1 頭骨 正面

墓2 頭骨 正面

墓1 頭骨 側面

墓2 頭骨 側面

人骨写真

墓1 病変 脛骨

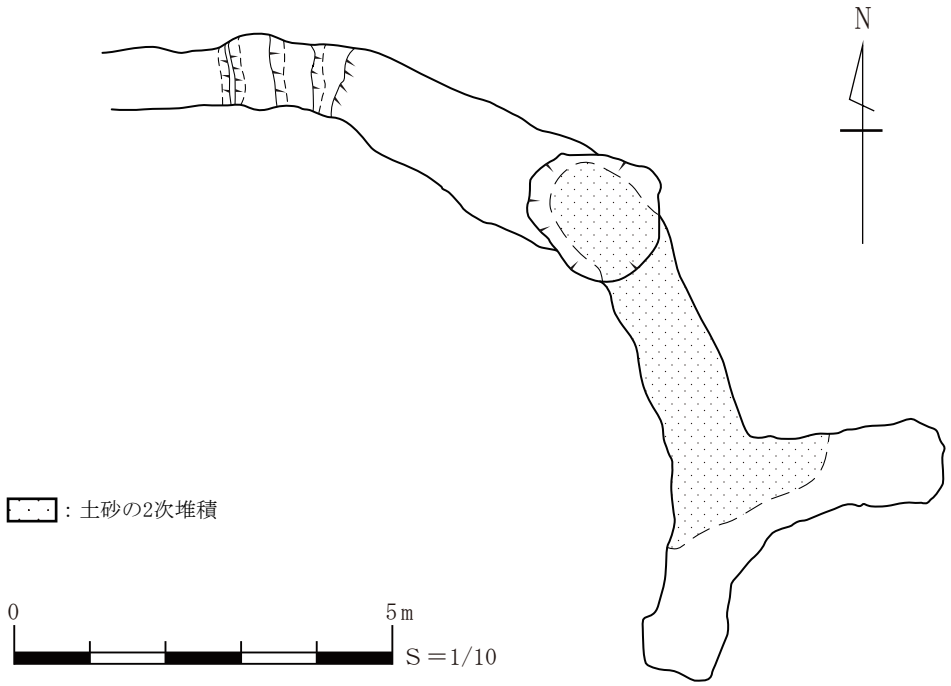
墓2 全身

第４章　報告②－千代田カギモリ原の壕－

第１節　壕１

壕１は、琉球石灰岩の緩斜面を地下へ掘り込んで構築されている。壕口は、西へ開口し、地下壕へいたる塹壕を有する。塹壕は、幅約 80 ㎝で、深さ約 1.8m ほどである。地下壕へは、壕口部分から階段が３段つくられ、地下へと下る。階段の段差は約 10 ㎝～ 20 ㎝ほどである。階段が終わった部分からさらに南東方向へ斜面地が形成され、約 3m 進んだ部分に長軸約 2m、短軸 1.5m の楕円形の縦穴部分へいたる。縦穴の深さは、落ち込み前の床面から約 1.2m、天井までは約 2.3m を測る。この縦穴からさらに南南東の方向へ地下へ傾斜する入口が設けられている。入口部分は、石灰岩礫の２次堆積などもあり、現況としては約 80 ㎝、幅約 1.0m と非常に狭い。この高さ約 80 ㎝～ 1m の通路が約 3m ほど南南東にむいて掘り込まれ、南南西と東向きの二股に分かれる。それぞれ約 2m 直進して行き止まりとなるが、この二股部分は高さが約 1.8m、幅約 1m と通路部分に比して広く構築されている。特に、南南西側の突き当り部分は、方形状に角をもってほりこまれており、壕口部分に比して丁寧なつくりである。壕１は、現在の地表面から塹壕部分をへて縦穴の底へ至るまでに約 3.5m の高低差を有する。また、縦穴の底面から二股の突き当り部分までは、約 1m ほどの高低差を有しており、地下へ向かって壕を構築している。壕内からは、薬莢が１点のみ確認された。

壕１の南側には、墓２が位置するが、この墓２の周辺部にはコンクリート材が非常に多く散乱し、一部地表面にコンクリ―を敷いた範囲がみられた。これについて、聞き取り調査において、壕２の壕口部分へ設けられたコンクリート壁を構築するための工事用の車の道であるとの証言がえられた。



第７図　壕１平面図（S=1/10）

写真 20　壕 1・壕口近景

写真 21　壕 1・壕内の階段遺構

写真 22　壕 1・壕口内部

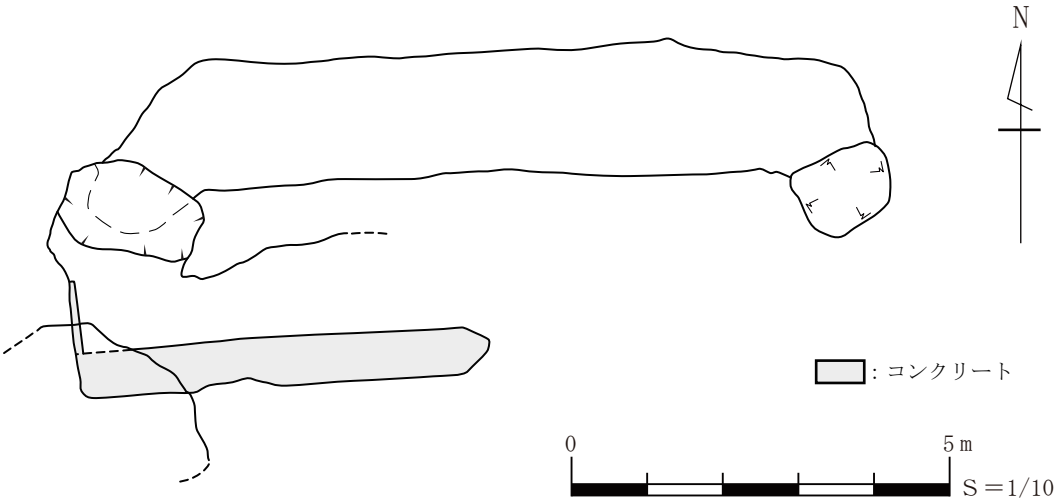
写真 23　壕 1・薬莢検出状況

写真 24　古墓 2 の周辺部に散乱するコンクリート片

写真 25　古墓 2 の周辺部に敷かれたコンクリート

第 2 節　壕 2

壕 2 は、石灰岩の小規模な高まりの頂上部付近に構築されている。自然の洞穴を利用して壕を構築している。壕口の手前には、長さ約 2.7m、幅約 60 cm、高さ 95 cmのコンクリートの壁が設けられ、壕口の壁面部分に対して L 字形を呈する。コンクリート壁の先端部は三角形をなし、表面への加工は確認されない。壕口を隠すとともに、壕内への防壁を目的として設置されたと考えられる。壕口からは、約北側へ進むが、現況としては約 1m 近い石灰岩礫の流入などが多くみられる。また、壕口からは比較的急な斜面地となっており、現地表面から約 2m ほど下る。その北進した先は、長軸約 1.8m、短軸約 1.3m の楕円形の縦穴状に落ち込んでおり、この落ち込み部分から東側へ約 90 度折れ曲がる。この東進する壕内は、幅が約 1.6m、高さ 1.7m ほどと比較的広い空間を呈している。そして東進した突き当り部分にもう一つの壕口である縦穴が位置する。この縦穴は､壕口部分で約 1.1 × 1.3m の略隅丸方形状の形態をなし、現地表面から、約 5.1m の深度を有して、壕内へと至る。壕内部からの遺物は確認されなかった。



第 8 図　壕 2 平面図（S=1/10）

写真 26　壕 2・壕口①近景

写真 27　壕 2・壕内部①

写真 28　壕 2・壕内部②

写真 29　壕 2・壕口②近景

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちよだがぎもりばるのふるばか・ちよだがぎもりばるのごう
書名	千代田カギモリ原の古墓・千代田カギモリ原の壕
副書名	陸自宮古島(29)文化財調査業務委託(宮古島市)に伴う発掘調査報告書□
巻次	ー
シリーズ名	宮古島市文化財調査報告書
シリーズ番号	第14集
編著者名	久貝弥嗣・山口直美・株式会社文化財サービス
編集機関	宮古島市教育委員会
所在地	〒906－0103　沖縄県宮古島市城辺字福里600－1番地
発行年月日	2018(平成30)年3月

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	調査原因
収録遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
千代田カギモリ原の古墓	宮古島市上野字野原83-5	-	-	24° 49′ 44″	125° 10′ 45”	平成29年10月30日～平成30年3月31日	2基・24㎡	記録保存調査
千代田カギモリ原の壕	宮古島市上野字野原83-5	-	-				2基・30㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千代田カギモリ原の古墓	古墓	近世～近代	岩陰墓	沖縄産施釉陶器・無釉陶器等	推定被葬者数は墓1が19人、墓2は1人。
千代田カギモリ原の壕	戦争遺跡	太平洋戦争時	旧日本軍構築の壕		第205飛行場大隊（通信隊）関連する戦争遺跡と考えられる

宮古島市文化財調査報告書第 14 集

千代田カギモリ原の古墓・千代田カギモリ原の壕

－陸自宮古島（29）文化財調査業務委託（宮古島市）に伴う発掘調査報告書－

発　行　年：　平成 30(2018) 年 3 月

発行・編集：　宮古島市教育委員会

〒 906-0103　沖縄県宮古島市城辺字福里 600-1

TEL：0980-77-4947　FAX：0980-77-4957

印　　刷：　有限会社アプロ